

2026年2月18日

NPO関連予算公開ヒアリング・昼休みトークイベント

「つなぐ力」をもつ商店街

市民セクターにできること

流通科学大学 新 雅史

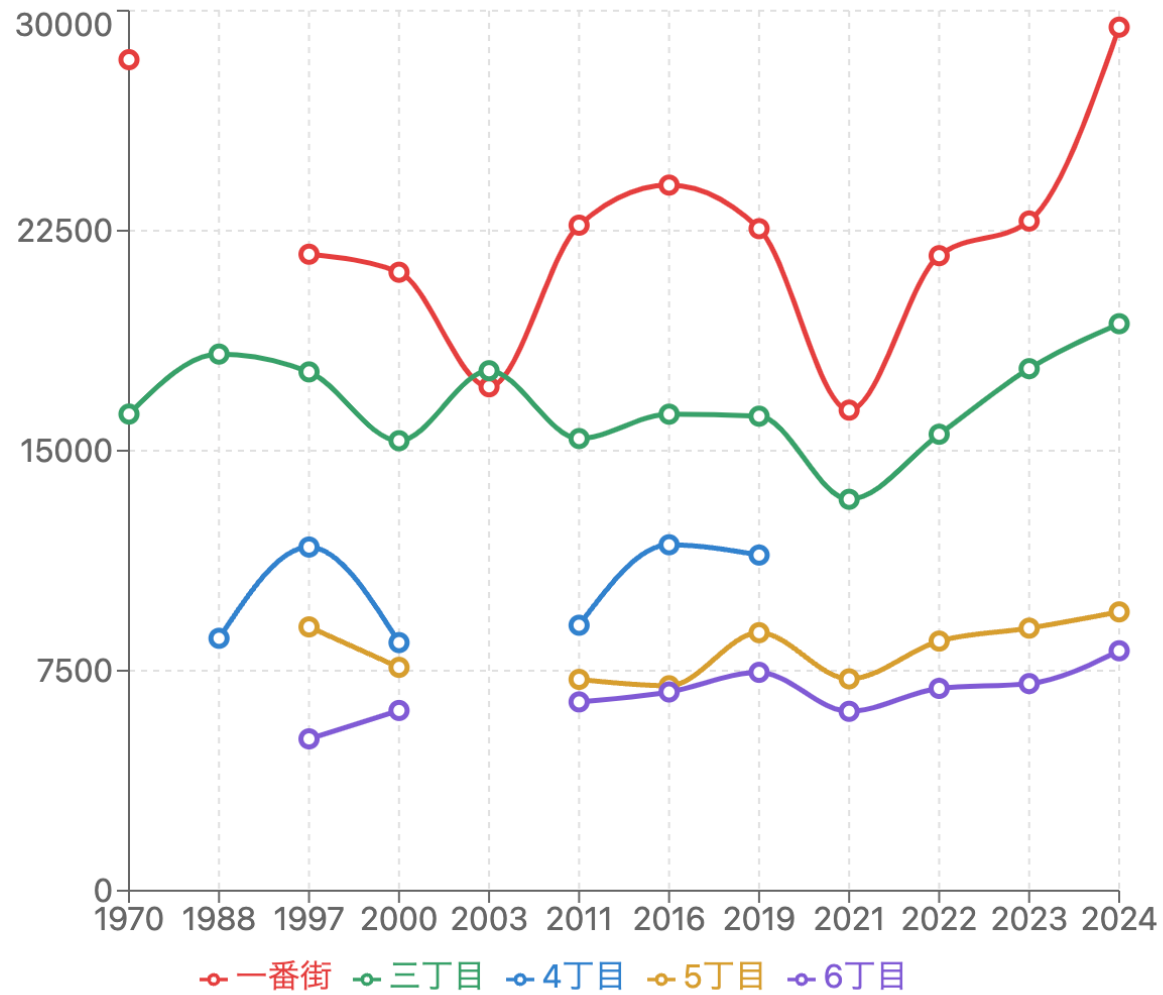
商店街は衰退しているのか？

「商店街は衰退している」と言われて久しい。シャッター通り、高齢化、後継者不足。商店街に対して負のイメージをもつ人は多いと思う。

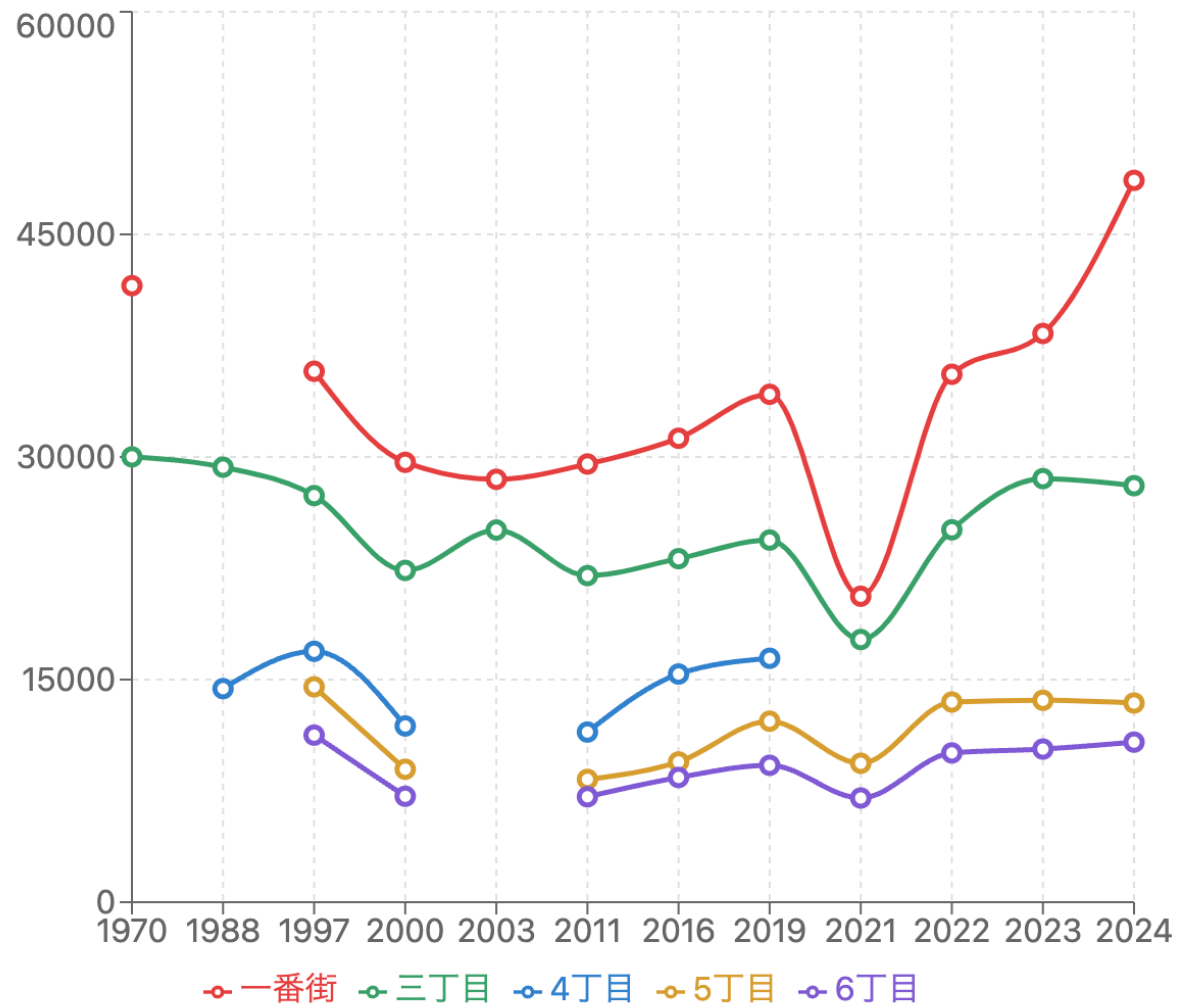
実態はどうか。150年以上の歴史をもつ神戸・元町商店街では、歩行者通行量が1970年代に調査をはじめて以来、過去最高の数字を記録した。神戸だけではなくいくつもの街の商店街（とりわけ中心的な商店街）で人が戻ってきている。

ただし、それは「昔の商店街」がそのまま戻ったということではない。何が変わったのか。

元町商店街 地点別通行量の推移【平日】



元町商店街 地点別通行量の推移【休日】



どういったお店が増えているのか

飲食店、とくに喫茶店やカフェが増えている。また、古着店や古本屋、買取店など、リユースや**二次流通**を担う店舗も目立つ。これらは大規模商業施設にはあまり見られない業種・業態である。

近年は地方都市でも中心部への人の流入が進み、それとともに**生鮮品**を扱う店舗も増加している。

さらに、アーケードなどの公共的空間を活用した**マルシェ**も広がっている。

しかしその一方で、かつて中心商店街を支えてきた**専門店**は急速に**減少**している。

「隠れた」店の増加

変化は商店街のストリートレベルだけではない。**路地裏、一本外れた通り、近くのマンション**。商店街の「周縁」に店が増えている。

不定期営業の店も増えている。週に2~3日だけ開ける店、予約制の店、SNSで告知して開く店。従来の「毎日シャッターを開ける」店とは異なる動きがある。

こうした店は統計にも通行量調査にも現れにくい。商店街は界限にその「生態系」をひろげつつある。

では、そもそも「お店」とは何か。

お店とは何か

お店とは、「誰かを待つ存在」

誰が来るかは分からない。だが、決まった時間に店を開けて、お客さんを待っている。それが日々くり返されることで、**地域に一定のリズムが刻まれる**。

店を営む人は、なじみの客、いわゆる常連を増やそうとする。そのほうが経営は安定するからである。そして常連にとってその店は、居心地のよい場所になる。家庭や職場とは別の居場所。こうした場は「**サードプレイス**」と呼ばれている。

「行けば、誰かが待っていてくれる場所がある」。
この安心感こそが、お店や商店街の本質である。

制度的な場との違い

制度的な場

介護施設、福祉事業所、医療機関。
「誰が来るか」は制度によって決定されている。対象者は認定・判定を経て「利用者」になる。施設は目的をもって訪れる場所であり、ふらりと立ち寄る場所ではない。

お店

「誰が来るかわからない」まま、その場所をあけている。来る人を選ばない。客として、消費者として、誰でも気軽に関わられる。しかも、入りやすくするために、道に対して開いて、はみ出すことすらある。

高齢化や福祉社会化によって制度的な場が増えている。ただ、制度的な場だけでは地域の中での交じり合いがなくなる。人の選別においても、空間の性格においても、この二つの場を重ね合わせることで（とくに地域にねざした）商店街の新しい可能性になる。

「つなぐ場所」としての商店街

①

過去と現在

暮らしの痕跡が残っている場。
過去・現在・未来をつなぐ場。

②

人と人

「待つ」ことによって生まれる第三の場所。居てもよいし、居なくても許される場。

③

人とモノ

地域で獲れたモノ・加工されたモノが利用者に渡される場。眠っていたモノを次の使い手に届ける場所。

④

制度と非制度

制度が届く人と、制度では届かない人が同じ場所に居合わせる。重なり、中間的な領域。

3つの実践から、この「つなぐ」力を見ていく。

実践① KUSC × 竹山団地

生活を共にしながら商店街をつくる | 神奈川大学サッカー部（横浜市緑区）

大学のサッカー部員が、高齢化の進む団地の空き住戸に住み始めた。いわば「現代版セツルメント」である。

大学・住宅供給公社・JANPIA助成を組み合わせた持続可能な仕組みとして設計されている。

学生は「支援者」ではなく「隣人」として暮らす。挨拶、ゴミ出し、立ち話。福祉サービスではすくいきれない日常の接点が生まれている。

「部活動」という制度に埋め込むことで、メンバーが替わっても途切れない。

実践② 大島紬の「預かり・活用」

人とモノをつなぐ | 一般社団法人紬貴（鹿児島）

鹿児島家庭にはタンスに大島紬が眠っている。思い出のある着物を「売る」ことには心理的な痛みが伴う。

紬貴は「買い取る」のではなく「預かり、活かす」関係をつくった。持ち主は、自分の着物が若い世代に着てもらえる様子を見守ることができる。

大島紬を着た若者が天文館（鹿児島の商店街）を歩き、まちに新しい風景が生まれた。

家庭に眠るモノが地域に開かれ、持ち主・若者・商店街の三者が同時に潤う。

実践③ 沖縄マチグウ

過去と現在をつなぐ | 那覇市・第一牧志公設市場とその周辺

那覇のマチグウは、巨大な闇市から出発し、地域の暮らしを支える場所として育ってきた。

しかし近年、インバウンドの急増により、地元向けの店が観光客向けに転換しつつある。地域住民にとっての「いつもの場所」が遠くなっている。

2022年に新市場が完成した。戦後から続く暮らしの記憶を、どう引き継ぐかが問われている。

3つの実践が示すもの

KUSCは、「人と人」を制度の外側でつなぎ直した。支援する側／される側という関係ではなく、「隣人」として同じ場所で暮らすことで日常の接点を生み出した

大島紬の実践は、「人とモノ」の関係を変えた。単なる売買ではなく、「預かり、活かす」という回路をつくることで、持ち主の記憶と次の使い手を結びつけた

マチグラーは、「過去と現在」をつなぐ場である。戦後から続く暮らしの記憶を引き継ぎながら、観光と地域の生活をどう両立させるかが問われている

いずれも共通しているのは、お店や商店街がもつ「つなぐ力」を引き出そうとしている点である

「つなぐ場」としての商店街

商店街の「つなぐ力」を活かせるかどうかは、**政治や行政がそれをどう理解し、どう位置づけるかに左右される**

たとえば、商店街の前の道路を「通行のための空間」とみなすのか、それとも「滞在や交流が生まれる公共的な場」とみなすのか

商店街を「モノを売る商業の場」に限定するのか、それとも「地域の産品や担い手と結びつく場」と捉えるのか

解釈が変われば、商店街の役割と可能性も変わる

まとめ

一部の商店街に人が戻りつつある。しかし、それは「昔の商店街」がそのまま復活しているわけではない

いまの商店街は、過去と現在、人と人、人とモノ、制度と日常を結び直す多層的な場へと姿を変えつつある。にもかかわらず、政治や行政は、依然として商店街を「商業振興」の枠内でしか考えていない。政治や行政の方が「遅れている」

必要なのは、解釈の転換である。商店街を「売上を上げる場所」としてではなく、分断された領域をつなぎ直す公共的インフラとして位置づけ直すこと。

高齢、障がい、子ども、生活困窮、商い、文化継承。これらを縦割りで処理するのではなく、商店街という開かれた空間の中で横断的に支える設計が必要